

二〇二〇年度入学試験問題 (第一回)

国語 (五十分)

【注意】

- 一 この試験の問題文・設問は、1ページから14ページに印刷されています。
- 二 解答は、すべて別の「解答题紙」に記入しなさい。
- 三 文字は、正しくきちんと書きなさい。
- 四 、。 「」はそれぞれ一字と考えなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「おれ(山口拓馬)は、やる気なくクールな小学六年生。ある日、病気がちな弟、健児が、療養先から帰ってきた。健児は、「これをかければどこにでも行ける」と信じるゴーグルをかけ、「おれ」のペースを乱し始める。

一方、「おれ」は、体育大会のハードル選手に、でくのぼうの「でくちゃん」と共に選ばれ、練習を重ねてきた……。

「大会って、もう明日なんだね」

おれの隣で健児がいった。

「でくちゃんが前にいったよ。おにいちゃんは速いから、八位入賞は絶対だつて。メダリスト候補なんだつて」

「おおげさんだよ、でくちゃんは」

謙遜じゃなくて、まじめにいった。なのに健児は、おれの話をもるきり無視して、こういった。

「ぼくも一度だけ見たことあるよ。四年から五年くらい前、おにいちゃんが小学校の運動会で走ったの。リレーの選手でアンカーやって、三位でバトン貫つてさ、最後の直線コースのところであたりも抜いて、一位になった」

「なんでそんなの知ってるの」

「だって、こつちにきてたから。たまにはうちに泊まりなさいって、おかあさんが迎えにきてさ。でも、おにいちゃんには会ってないんだ。そのあと、すぐにぜんそくの発作が出ちゃって、それで、さっさと静岡の家に戻された。だから、そこしか見てないの。おにいちゃん、すごく速かった——覚えてない？」

そういわれても、ぜんぜんピンとこなかった。リレーの選手に二回か三回、選ばれたのは事実だけれど、レースの中身がどうかこうとか、細かいことは覚えていない。それに、速かったっていうのも、実力なんかじゃなかったはずだ。あのころはおれもガキだったから、選ばれたことがうれしくて、へんに鼻息荒くしちゃって、飛ばしまくってただけなんだ。だから、そんなに期待されても困るんだよな、とおれは思った。でも、そのことをいいます前に、健児がぼつりとつぶやいた。

「人間ってさ、忘れることの得意な生きものなんだつて。本気を出さずに、サボっていると、本気の出しかた忘れちゃうって」

「それ、だれがいったの。\* なんとかバグ？」

「ううん。今のも、でくちゃんに聞いた。サッカークラブをやめるとき、コーチの人にいわれたみたい。でくちゃんね、小さいころからサッカークラブに入ってたのに、下手くそだから、いつも補欠で、つまなくなつてやめたんだ。どうせ補欠だ、みたいな気持ちで、練習サボつてばかりで、逃げるようにやめちゃつたつて、でくちゃん、自分でいつてたよ。だからコーチにそういわれたあと、なんだかすぐく落ちこんじゃつて、夏休みじゅう悩んで悩んで、それで決心したみたい」

「決心したつて、なんのこと」

「自分で自分を変えること。変りたいつて、でくちゃん、いつてた。今の自分は好きじゃないつて。このまま中学に進んでも、いいことなんてない気がするつて」

そこまで健児がいつたところで、上流の橋のたもとについた。おれたちはすぐにUターンをして、下流に向かつて走りはじめた。

「みんな、そうだと思ふんだよね」

話の続きを健児がいつた。

「自分のいやなところとか、少しずつでもなくしてさ、なりたい自分に近づきたいつて、そういう気持ち、あるじゃ

ない」

「べつに、ないけど。おれの場合は」

「じゃあ、おにいちゃんが特別なんだ。普通は、みんな思つてる。変わりたいつて思つてる。変われないのは、その人が本気で思つてないからなんだ。本気で思えば変えられる。ぼくも本気で思つてたもん。静岡の家にしたときだつて、入院してたときだつて、もつと元気に、もつと丈夫にならなくちゃつて思つてた。そしたら、ほんとにそうなつた。ほら、ぼく元気になつたでしょ」

「たまたま薬が効いたの、それは」

「ね、いいこと教えてあげようか」

「人の話を聞けつて、おい」

いつてみたけど、むだだつた。

「ぼくね、今でも思つてるんだ。今よりもつと元気になつて、自転車だつて、もつと上手に乗れるようになろうつて。それで、いつかは自分の足で地面を蹴つて走るんだ。

本気になつたら、ぼく、マラソンの選手にだつてなれるよ、きつと」

そういいながら、健児はペダルをぐんぐんと強く踏みこんだ。うつむき加減に走つていたから、それまで気づかなか

かったけど、いつのまにか健児の目には、ゴーグルがかぶせられていた。

「ほら見て、速い」

健児はいって、おれの目の前におどりでた。

「よそ見するなよ、危ないぞ」

おれは健児の背中にいった。いったときには、もう遅かった。自転車の前のタイヤのゴムがコンクリートの塊みたいなものを弾いて、I 揺れた。つっぱっていた健児の腕が、ハンドルといっしょに左に曲がった。右ならよかった。草むらだから。でも、左には土手の斜面があった。

自転車は急な斜面の上から下まで、滑っていった。バランスはすごく悪かった。ふらふらしてたし、がくがくしてた。倒れる直前大きくねじれたハンドルから手をぱつと離すと、健児はバンザイをした格好で、地面に叩きつけられた。

砂煙がもわんと上がった。

あわてて側に駆けつけたとき、健児は潰れたカエルみたいに、II うつ伏せになっていた。カゴのひしゃげた自転車は横倒しになったまま、後ろのタイヤを回しつづ

けて、カラカラと音をたてていた。

「生きてるか？」

声をかけたら、健児はこくんとうなずいた。ちぎれた草とほこりと砂が、服のあちこちについていた。おれは健児を立ち上がらせて、汚れをばんばんはらってやった。ケガはしていないようだったけど、顔を近づいてよく見てみると、ゴーグルの右のレンズの端に、ひびが一本、入ってた。

D 「バカだな、おまえ、痛かっただろ」

おれは健児をひじて小突いた。ケンカをうったわけじゃない。安心したから、ふざけてやった。

だから、健児も笑っていった。

「痛かったけど、気持ちよかった。見てたでしょ？ ぼく、飛んじやった。今まででいちばん遠くに飛べた」

おれの肩に手をかけたまま、健児はぱちぱちまばたきをした。ふたつの目玉が、レンズの奥で星よりも強くチカツと光った。

〈中略〉

「山口くん」

応援席でお昼ごはんを食べているとき、撮影係の原田さゆりがおれのところにやってきた。肩までの髪をひとつにまとめて、腕章をつけた原田の首には、でっかい望遠レンズがついたカメラのひもがかけられていた。

「すごいね、予選、ぶつちぎりのトップじゃなかった？もしかして」

ひとつとなのに、にこにこしながら、興奮ぎみに原田はいった。

「たいしたことない。予選のときって、みんな本気で走らないから」

うれしくせに、それでもやっぱり、山口拓馬はクールにいった。

「じゃあ本選も、頑張つて」

「ん」

「あたし、応援してるから」

「ん」

「写真、撮ってもかまわない？」

「ん。でも、フラッシュは、やめといて」

「わかった。あとね、関係ないけど、このまえ、すごくカッコよかった。ほら、体育館\*で、どなったの。あの先

生、あたしも嫌い」

嫌い、のところを、ほかよりずっと大きな声でいいきると、原田はくるりと後ろを向いて、自分の席に戻ろうとした。でも、またすぐに体の向きを百八十度回転させて、ひそひそ話をするときみたいに、おれの耳もとにささやきかけた。

「——もうひとつだけ、聞いてもいいかな」

「なに？」

「それ、いったい、どうしたの？」

そういいながら、原田はおれの頭にちらりと目をやった。

「ああ、これ」

おれは、原田の視線を感じたあたりに手をやって、そこにのってる、トンボの化けものみたいなレンズを指でつついた。

「おれの弟の宝物なんだ。縁起担いで借りてきた。これ、

ただのゴーグルみたいだけど、でも、ただのゴーグルじゃないんだぜ。その名も、超時空ミラクルゴーグル。行きたいところならどこでも行ける」

「どこでも行ける？」

首をかしげた原田の髪が、ぶらんと揺れた。

本選開始を告げるホイッスルの音がして、応援席からトラックへ選手がぞろぞろ動きはじめた。

「山口」

先にトラックに出たでくちゃん、おれの名前を呼んだ。

「いま、行く」

おれは弁当箱を片づけながら答えると、きよとんとして  
いる原田に向かって、思いきり声をひそめて、いった。

「……だれにもいわない?」

きよとんとしたまま、原田はちいさくうなずいた。

「きのう、火星に行ったんだ」

そういったときの山口拓馬は、もうそれ以上はないって  
くらい、きまっていたんじゃないかと思う。

「弟のやつ、このゴーグルかけて、自転車に乗って、火星  
に行ったの。着陸したとき、岩にぶつけて、できたひびが  
これ。ほんとだぜ」

それから何度か、ピストルの音が煙けむりをたてて空にの  
ぼった。五十メートル走、百メートル走と、本選レースが  
進むにつれて、応援席から上がる声にも熱っぽいものが混

じりはじめた。おれたち男子ハードル選手はCグループを  
先頭にして、スタートラインの少し手前に整列したまま腰  
を下ろした。ふりあてられたコースは、でくちゃんが五  
コースで、おれは三コース。まだまだ気持ちに余裕があつ  
た予選のときはまるでちがって、本選前の選手のまわりの  
空気はかたくこわばっていた。

やがて、女子の七十メートルハードルのレースが終わ  
り、八十メートルハードル用にハードルが並びかえられ  
た。

「男子八十メートルハードル、本選レースが始まります」

スピーカーから声が流れた。Cグループの六人は、ス  
タートラインに両手をつくると、あつというまにゴールし  
た。Bグループの六人が、それを合図に腰を浮かせた。  
ゼッケンをつけた六つの背中がコースの上に並んで立った。  
「頑張れよ、でく」

うちの学校の応援席で、だれかがいった。ひときわでか  
いでくちゃんの足が、  
Ⅲ 地面をひつかいた。

「位置について——用意」

……。パンツ。

ピストルの音が鋭すどくなった。ものすごくいいスタート

だった。でくちゃんも、他の五人の選手も、第一ハードル、第二ハードルをほとんど同時にまたいでいった。だれもスピードを緩めなかつたし、だれもハードルを倒さなかつた。そのまま六人全員の後ろ姿が小さくなって、ゴールに張られた白いテープが係員の手から離れた。

歓声かんせいがさらに大きくなった。

選手の体はゴールを過ぎて、何メートルか行ったところで、スピードを下げて、やっと止まつた。一位の選手が天に向かって、拳こぶしを高く突き上げた。腰のところに巻きついたまま、ゴールテープがひらひら舞つた。

でくちゃんだった。

うちの学校の応援席から、声が上がつた。

「入賞確実！」

「でくちゃん、やつた」

声だけじゃなくて拍手も起きた。<sup>F</sup>何度も拳を突き上げながら、でくちゃんは口を大きく開けた。曇りはじめた空を仰いで、深呼吸をして、いきなり吠えた。

「でくじゃないっ」

ざわめきのなかで、たしかにおれはそう聞いた。びつくりするほど太くて低い、猛獣もうじゅうみたいな声だった。

「でくじゃないんだっ。違ちがうんだっ。おれの名前は中上まもるっ。これからも先も、死ぬまでずっと中上まもるだ。覚えとけっ」

怒ってなんかいなかった。そういつたときのでくちゃんG、じゃない、中上まもるは、顔いっぱい勝利の笑みをたたえてた。応援席のやつらは、みんな、いったいなにが起きているのかわからないという表情のまま、つられて拳を突き上げた。

「覚えとけえっ」

叫びつづける中上まもるの体から、進行係の生徒ふたりが素早くテープをまきとつた。ふたたびゴールにテープが張られて、拍手がいつときまばらになると、おれはゴールHを目のところまでスチャツと下ろして、前に進んだ。

Aグループの六人が、スタートラインに並んで立つた。

「位置について」

おれは両手とひざの片ほうを地面についた。

「用意」

おしりを静かに上げて、それから、ゆっくり首を起こした。

(笹生陽子『きのう、火星に行った。』による)

【注】

\*でくのぼう——人の言う通りに動くだけで、体は大きい

\*体育館で、どなったの。——出場選手を励ます会で、で

が役立たずの人のことを、ばかにして言

くちゃんがステージで倒れた。かついだ先生がよろめ

う呼び方。

いたのを、他の先生が笑ってしまい、「おれ」は笑った

\*なんとかバード——健児の好きな映画監督 スピルバー

先生に対して「人の不幸をへらへら笑うな」と怒鳴った

グ」のことを指している。

のだった。

問一——線部A「なのに健児は、おれの話をもるきり無視して、こういった」・C「人の話を聞けて、おい」 試してみたけど、むだだった」とあるが、健児がそのように話し続けたのはなぜか。それぞれ説明しなさい。

問二——線部B「変わりたいって、でくちゃん、いった」とあるが、でくちゃんは、どのように変わりたいと考えていたのか。説明しなさい。

問三 空欄 I Ⅲ にあてはまる最もふさわしいことばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア ズザツと      イ かくんと      ウ べったりと



問四 — 線部D「バカだな、おまえ、痛かっただろ」とあるが、この時の「おれ」の健児に対する気持ちとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 健児の無事を知って緊張感がゆるむと同時に、健児の向こう見ずなひたむきさに対していとおしく思う気持ち
- イ 昔よりもずっと病弱になっていると認めたくなくて、わざと元気にふるまってみせる健児を痛々しく思う気持ち
- ウ クールな「おれ」に反感を抱き、「おれ」が望んでもいない危険なまねをしでかした健児に、あきれはてる気持ち
- エ 「おれ」の話にまったく耳を貸すことなく、あげくの果てに横倒しになった健児に、いらだちがわいてくる気持ち

問五 — 線部E「火星に行ったの」とあるが、このセリフから「おれ」についてわかることは何か。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 「おれ」にとっては妄想もうそうとしか思えないことを主張し続ける健児に対して、うんざりしている。
- イ クールな「おれ」にゴーグルは似合わないと感じ、火星の話を持ち出してはぐらかしている。
- ウ 原田の関心をひくために、もったいぶった様子で、秘密にしていた健児の話題を打ち明けている。
- エ 健児がそうしたように、ゴーグルの力を信じることで、「おれ」も変わっていきたいと願っている。

問六 — 線部F「何度も拳を突き上げながら、深呼吸をして、いきなり吠えた」というでくちゃんの行動は、どのような決意のあらわれなのか。説明しなさい。

問七 — 線部G「でくちゃん、じゃない、中上まもるは」とあるが、なぜ「おれ」は、でくちゃんのことを、今までとは違って名前で呼んだのか。「おれ」の思いもわかるように説明しなさい。

問八 — 線部H「おれはゴーグルを目のところまでスチャットと下ろして」とあるが、この行動には、「おれ」のどのような気持ちがあらわれているか。ゴーグルがもつ意味もふまえて、七十五字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

情報を入手しよう、選択しよう、\*アウトプットしようなど、いろいろと書いてきました。でも、そもそもなぜ、情報を扱う必要があるのでしょうか。ちょっと哲学的になりませんが、一緒に考えてみましょう。

同じような疑問に、「なぜ人はものを食べるのか」というものがあります。そうしないと栄養素が得られず、肉体的に成長できないし生命も維持できないから、というのが最も短絡的な答えでしょう。

では、十分に栄養バランスのとれたサプリだけで生きていけるかという、生きていけるかもしれないませんが、私はイヤです。美味しいものを楽しく食べたいです。安くて美味しいものも、それなりの値段の美味しいものも食べたい。人間にとって食事とは、X はずです。

食べたものは大半が体から排出Aされます。そして、ごく一部が血肉Aになります。情報も同じです。出ていくまでもなく蒸発Aするように記憶から消え去ってしまうのです。しかし、一部が血肉になるのは同じです。いい情報が絶えず取り入れ、そして排出(忘れたり、捨てたり、アウ

トプットしたりすること)を繰り返すことは、いい筋肉やいい血液を作ると同じように、情報アンテナを磨いたBり、\*審美眼を鍛えるために欠かせないことなのです。

それに、血肉にならなくても、記憶は残ります。忘れたつもりでも、何かのきっかけで、あれを食べた、どこで誰と食べたと記憶はよみがえります。その食事の記憶は、まるで教養のようです。身につけるつもりもなく摂取してきたものは、年月を経るうちにいつのまにか、豊かな人生を送るのに欠かせない教養と呼ばれるものに変貌Bを遂げています。

情報を入手し続けること、得た情報を活用することよりも、I、情報に負けてしまわない基礎体力を作ること、そして、いつか思い出せる教養という名の思い出を蓄積Bしていくことだと行っていいでしょう。

私は本を読むと、すぐにその内容を忘れてしまいます。たいていの場合、読んでいる途中Bで、前のほうに書いてあったことを忘れます。それでは書評が書けないので、付箋Bを貼りながら読んでいます。付箋を貼るのは、忘れることを前提とした作業なのです。

面白かった本を本棚に入れておくのも、忘却を織りこ  
んでの行為です。そこに私の脳の外部記憶装置として本棚  
があり、本があるから、安心して忘れられると言えます。

忘れたはずのことも、些細なきっかけで思い出すこと  
があります。「前に読んだ本に書いてあった」ことだけ思い  
出せば、十分です。あとは、本棚の前に立ってその本を  
探し出せば、そこには以前読んだときと同じ情報が書かれ  
ています。

つまり、忘れたつもりでいても、捨てたつもりでいて  
も、実際には忘れていないのです。

私は、情報との距離感はこの程度でいいと思っていま  
す。もちろん、自宅の場所や銀行の暗証番号といったデー  
タはすぐに頭の中から引き出せないと困りますし、何かの  
資格試験に臨む際には無理矢理の暗記も必要でしょう。

Ⅱ、そういった例外を除いた、たいていの場合  
は、どのあたりに情報があるかわかっていて、さらに、ど  
うやったらそこにアクセスできるかがわかっているれば、十  
分です。裏を返せば、そのために付箋を貼り、本棚はジャ  
ンル別に整理しておく必要があるのです。

Ⅲ、読んだことを何もかも覚えていようとした

ら読書は苦痛になるでしょう。読んだ内容は忘れていいと  
知ることが、本を多く読むコツと言えます。

書店へ行くと教養について書かれた本を多く目にしま  
す。まさに世は教養ブーム。この教養とは実は、捨てたつ  
もりで捨てていない情報のことだ、と私は考えています。

捨てたつもりゆえに、はつきりと覚えていないので、仕  
事に使う情報のようには役に立ちません。しかし、何かの  
きっかけで思い出したとき、教養は最強の情報になりま  
す。

教養は、「教養を身につけるための本」を読めば身につく  
ものではありません。教養は **Y** のある薬のような  
ものではないのです。教養は、時間をかけていろいろな食  
べ物を摂取してきたことで、体に備わった血肉のようなも  
のです。おいそれとは構築できないし、だからこそ、捨て  
たつもりでも捨てきれません。

忘れたつもりでも、子どもの頃に何度も聞いていた歌な  
どは、少し耳にただけで、かなりの部分を思い出せるの  
は、その歌が聞く人にとって教養になっているからです。

そしてこの教養は、思わぬ時によみがえってくるだけで

なく、思わぬ時に力を発揮します。

それは、仕事の場面で、です。仕事に必要な情報は、みな、必死になって収集します。だから、同じ仕事をしている人たちの間で、得られる情報の量に大差がつくことはありません。しかし、その人に教養があるかないかで、得た情報の活用範囲はまったく異なります。

教養があれば、得た情報が、自分の持っている教養の何に「似ているか」がわかります。何と「相性がいいか」がわかります。何と「組み合わせたら面白いか」がわかります。

この「何と」を多く持つていれば持つていられるほど、その人はアイデアを多く生み出せるわけです。一方で、教養のない人は何も生み出せません。また、周りと同じ程度の教養しか持つていない人は、はっと周りを驚かせるようなアイデアがひらめくことはありません。

問一 空欄 X にあてはまる最もふさわしいことばを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 栄養素を取るためだけの行為ではない
- イ 美味しいものを追求する行為ではない
- ウ サプリの物足りなさを補う行為である
- エ 会話を楽しみながら情報を得る行為である

ですから、これから新たな教養を身につけたければ、長く続けられるもの、自分の周りの人があまりやっていないものを始めることです。私が若いビジネスパーソンに歌舞伎見物をすすめるのはこれが理由です。歌舞伎そのものももちろん面白いのですが、それ以上に、得られるものが多いのです。

(成毛眞「情報の「捨て方」―知的生産、私の方法―」による)

#### 【注】

\*アウトプット——出力。ここでは情報を自分なりに表現すること。

\*短絡的——ものごとを単純に結びつけること。

\*審美眼——美しいものとみにくいものを見分ける能力。

\*ビジネスパーソン——仕事仲間。

問二 — 線部 A「情報も同じです」とあるが、いい情報を取り入れ、排出することで得られるものはなにか。解答欄らんの形に合うように、本文中より抜き出しなさい。

問三 空欄 I } III にあてはまることばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア もし      イ しかし      ウ むしろ

問四 — 線部 B「私は本を読むと、すぐにその内容を忘れてしまいます」とあるが、筆者は書評を書くために、具体的にどのような対策をしているか。二つあげなさい。

問五 — 線部 C「忘れたつもりでいても、捨てたつもりでいても、実際には忘れていないのです」とあるが、どうしてそのように言えるのか。説明しなさい。

問六 — 線部 D「教養は最強の情報になります」とあるが、なぜ「最強」と言えるのか。理由を説明しなさい。

問七 空欄 Y にあてはまる最もふさわしいことばを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 確実性      イ 偶発性ぐうはつ      ウ 即効性      エ 中毒性

三

次の①～⑤の——線部のカタカナを漢字にしなさい。

- ① 彼の勇姿にシゲキを受けた。
- ② ふかふかのベッドに身をユダねる。
- ③ 歩道からはみ出たらケイテキを鳴らされた。
- ④ セイコウな作りの置き時計。
- ⑤ ハタイロが悪くなってきた。

